



住居を好む。大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

八世紀(和銅年間)豊川左岸に八名郡が配され、服部郷には千人の人口があり、大野辺は二百五十人(三十戸)と推定されている。郷内では良質の生糸「赤引糸」が生産され、大野の服部神社でおんぞ祭りをして伊勢神宮へ奉獻された故事が残っている。



2018. 8. 20

「大野銀行」の歴史

「大野銀行」の歴史は、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

東三河の経済を支えた大野銀行



▲大野銀行豊橋支店(豊橋市広小路通・大正初期) 駅前でもひととき目立つ外観のモダンな建築であった。

江戸時代には近隣の産物の集散地として軒を並べる商家が隆盛し幕末になると、参詣道がまち中を曲尺する角地に、大野村「赤屋」の敷地が広がって、良質の地下水を使った地酒造りで繁昌していた。

大野村には御用金五百両の要請があった。幕府の役人は「大野は金穴に付き」と申し添え状を携えて来たという。

大野は宇連川沿岸において、最も地勢的に恵まれ、古代より常にこの付近の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

御用金の百両を「赤屋」が請け負い、次いで七十両を鍵屋とヤマモの二家、五十両を山形屋他五家、十両を医家の庄田元益が加えて五百両上納した記録が残っている。

その「赤屋」酒店が明治初め頃、廃業した跡に「紺屋」の染め物業が入り、その屋敷の一棟を創業時の銀行の店舗にしたと思われる。所在地は戸番のため不確かである

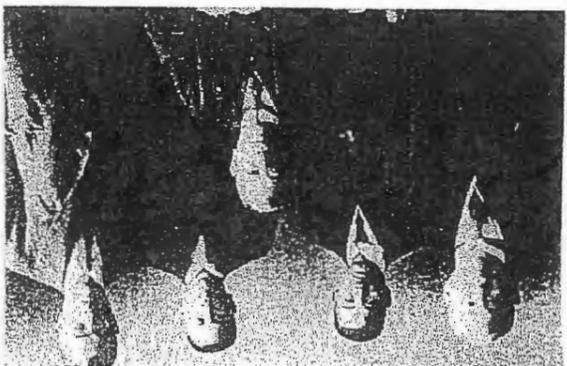
大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

大野銀行は、大野村にあり、大野村の中心となつて発展してきた。まちの小史から大野銀行設立と、その後を探ってみよう。

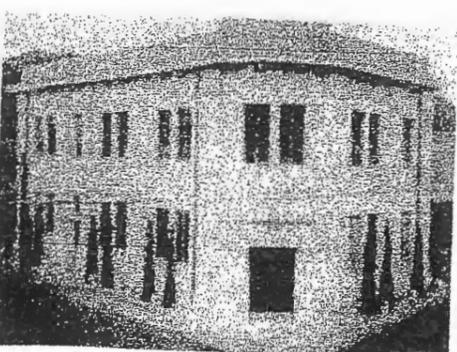


大野銀行創立時の重役たち(大橋家蔵)

明治二五(一八九二)年大野の戸数二百三十戸(約千百人)と成長し、二年後の全国長者番付表に東三河で唯一戸、ヤマモ大橋正太郎氏が載る快報があった。

明治一九年一月に奥三河初の民間銀行が誕生する。「大野町下山与平治外十五名は南北設業・八名の三郡に銀行はなく、貨幣経済流通の不備を解消しようとして山林金融を主目的として設立された」と記されている。

大野銀行は開業程なく生糸金融を担う新城支店を開き、更に三年後には商業金融の発展を期して豊橋支店を配置する。次々と東三河に支店網を拡大しつつ大正一一(一九二二)年赤羽根銀行と合併し、以後東三河の経済を支える地方銀行になる。そして、初代社屋では本店業務に支障を来してきた。その折から鳳来寺鉄道の駅と町を繋ぐ駅通りが敷地を通ることになり、町通りとの交点の角に欧風二階建ての新店舗を建築する。(写真大正一四年)



大野銀行本店(大野 鈴木茂穂氏蔵)

昭和初期、世界的金融動乱の荒波も堅実な経営で切り抜けて、創業かけ五十年、新生日本の昭和二十年、東海銀行と合併する。



▲行内に積まれた300万円(大橋五郎提供) 大正12年7月、取り付け臨時対策として預金者を安心させるために豊橋支店の行内に積まれた札束。現在なら50億円相当となる。